有明海と祭り

特集 1

大川の風浪宮

久留米大学経済学部教授　大矢野　栄次

風浪宮の三室

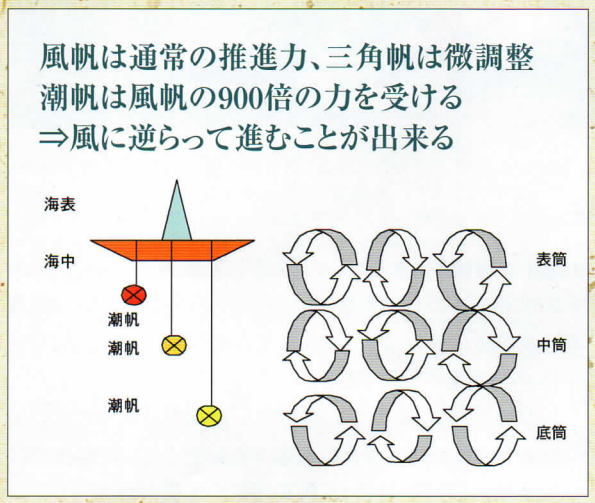
風浪宮は創建1800年といわれている。神功皇后が祀られている神社である。神功皇后が三韓征伐から帰国後、筑後川河口の大川若津港に到達した際、1羽の鷺が神功皇后が乗った船の舳先に留まった。その鷺が東北の方向に飛び去ったのを阿曇磯良丸（あずみいそらまる）に追いかけさせたところ、ある木の枝に留まった。その木を神木として祀らせたのが風浪宮の始まりである。風浪宮のある地は今日、酒見とよばれているがこれは鷺見の訛ったものであるらしい。またこの地一帯は青木とも呼ばれていた。

風浪宮の神儀では年に一回旧暦の4月1日に有明海の沖に出て海の神様をお迎えする儀式が行われる。その日は大潮の日にあたる。海の神様としては三種類の神様がある。綿津見（和多津見（わたつみ））の神、住吉の神、宗像（むなかた）の神である。綿津見の神は和多津見とも海神とも書くが、風浪宮では少童神（わたつみのかみ）と書かれている。これは和多津見神自体が海あるいは海水自体を表していることと関係あると思われる。綿津見神とは、上津綿津見神・中津綿津見神・底津綿津見神の三神である。住吉神とは上筒之男命（うわつつのおのみこと）・中筒之男命（なかつつのおのみこと）・底筒之男命（そこつつのおのみこと）の三神であり、宗像神とは年上から田心姫神（たごりひめのかみ）・湍津姫（たぎつひめのかみ）・市杵島姫神（いきちひめのかみ）あるいは、多紀理毘売＝奥津島比売命、市寸島比売命＝狭依毘売、多岐都比売命である。この宗像の三神はオリオン座の中心の三つの星を表していて夜の航海の際にオリオン座を目印にしたことの表れであると言われている。風浪宮に祀られる三室とはこの三種類の海の神様たちであるだろう。

海の神様の誕生

「古事記」によると黄泉（よみ）の国から帰ってきた伊邪那岐命（いざなぎのみこと）が筑紫の日向の橘の小門（おど）の阿波岐（あわき）の原で禊（みそぎ）をする。伊邪那岐命が水の底に沈んで漱いだ時に生まれた神が底綿津見と底筒之男命、水の中ほどあたりで漱いだ時に出た神は中津綿津見と底筒之男命、水の面のあたりで漱いだ時に生まれ出た神は上津綿津見と上筒の男命である。

上津綿津見と上津綿津見と底綿津見の綿津見神は阿曇の連（阿曇氏）が祀り、上筒男命と中筒男命、底筒男命は津守氏が祀る住吉神（墨の江三神）である。

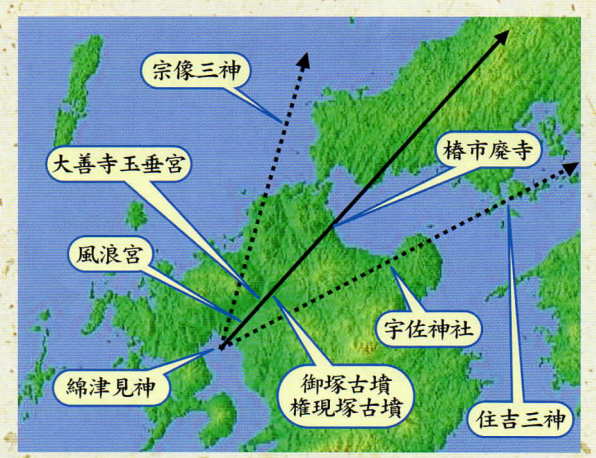


風浪宮の神儀では引き潮で俄かに現われた島に神主が上陸し、祝詞を上げながら、まず先ほどまで海底であった部分から上に居ます神様（上津綿津見神・上筒之男命・田心姫神）を、もう少し潮が引いたところで、中ごろに居ます神様（中津綿津見神・中筒之男命・湍津姫）を、そして、さらに潮が引いたところで底のほうに居ます神様（底津綿津見神・底筒之男命・市杵島姫神）を順にお迎えする儀式が行われるのである。この三種類の神様は風浪宮の本殿の中にそのまま三室に分けてお祀りされているらしい。伊勢神宮においても、かつては年に一回五十鈴川※1の川の中から天照大神（あまてらすおおかみ）をお迎えする行事が行われていたそうである。

先日、この儀式を間近に見学した人から「有明海の海から迎えられた海の三神は佐賀の脊振山の方に送られていった」と聞いた。佐賀の脊振山には脊振神社がある。そこで、背振神社を調べてみると、祀られているのは宗像三神である。有明海の海から迎えられた宗像三神は佐賀県川副町の犬井道（いぬいどう）あたりから脊振のジーベット山のボロ・メキ谷を越えて脊振山の頂上に居ます脊振神社に祀られているのである。かつて佐賀大学経済学部在任中にスリランカ出身の先生に古代サンスクリット語でボロ・メキの意味を調べてもらったところ「ボロは犬」、「メキは井戸とか水」の意味だと聞いたことがあった。つまりボロ・メキ谷とは犬井道ということになるのであろうか。※2

古事記の中で宗像三神が生まれるシーンはさらに興味深いものがある。天照大神が須佐之男命（すさのおのみこと）と天安之河原（てんのやすのかわら）を挟んで子を産むシーンがある。天照大神が須佐之男命（すさのおのみこと）の剣を取って三つに折って噛むシーンは「佐賀美邇迦美而」（さがみにかみて）とある。宗像三神が生まれるシーンは佐賀が美しいのである。この天安之河原が犬井道であるとおもしろいと思うのだが誰も同調しない。

試みに、有明海の真中と脊振神社を結ぶ直線を延ばしてみると、宗像神社にたどり着くのである。しかも、この直線上には香椎宮と宮地嶽神社がある。両社とも祀神は神功皇后である。※3この宗像ラインは女性神のラインとなっているのである。



※1／この五十鈴川は仲哀天皇が香椎宮で崩御したときに神功皇后が祀媛となった小山田の斎宮（天疎向津媛命（あまさかるむかつひめのみこと）を祀る）の北東方向1キロメートルに位置する現久山町の伊野神社（猪野神社：天照大神=天疎向津媛命を祀る）の西横を流れる猪野川であると考えられる。

※2／この説には反論が多い。脊振山付近は山岳仏教の地であり、例えば、脊振はソウルだというようにハングル語であるという説が根強いのである。しかし、ソウルは二音であり、脊振は三音であるからこの説は無理である。当時の山岳仏教は行基の時代であり、行基は三蔵法師の孫弟子であることから考えても梵語(サンスクリット語)の方が馴染み深いと思うのであるが如何に。

※3／香椎宮の祀神は仲哀天皇であるが、神功皇后も祀られている。

有明海と祭り

磐井の乱で消えた風浪宮東宮

風浪宮の東には、東の宮があったという伝えがあり、磐井の乱の後消滅させられたお宮らしい。すなわち、今残っているのは西の宮だというのである。大川市の地図では風浪宮の東には玉垂宮（たまたれぐう）があるはずであるが、行ってみても何処にあるのかわからない。大川市史では江戸時代に玉垂姫神社が大川にあったと記されている。

玉垂宮は玉垂命（390年没）が祀られているのだが、玉垂命とは景行天皇の子で藤(とうの)大臣であるという。頭（かしら）の大臣という意味ならば、大臣の中の大臣という意味では武内宿禰（たけうちすくね）であるという定説が説得力を持つ。しかし、藤を不二、不死、富士と読むならば、藤原氏の名前に繋がるかもしれないというのは考え過ぎであろうか※4。景行天皇が椿市（今日の行橋の椿市廃寺）で詠んだ歌がある。

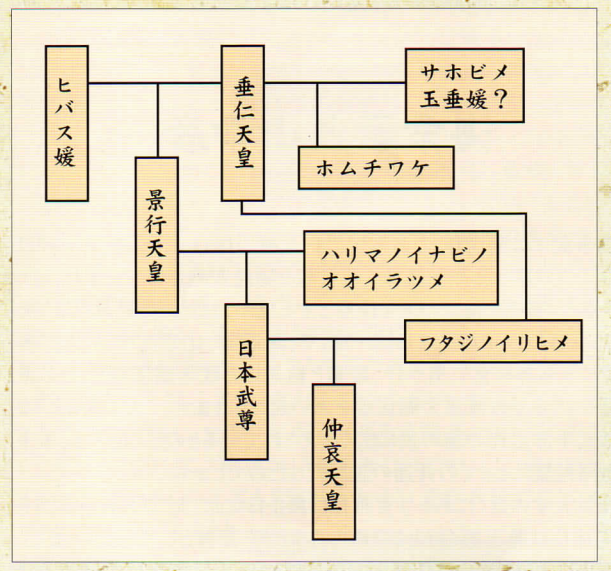
「紫は灰さすものぞ　海石榴市の八十のちまたに逢える児や誰」※5とある。藤は紫の染物の材料である椿（海石榴）の木の灰から得られる。また、聖徳太子の冠位十二階の最高位の色でもある。玉垂命に最も近い天皇の名前は、垂仁天皇であり、景行天皇（オホタラシヒコオシロワケ※6）の父である。しかし、玉垂命は景行天皇の子といわれているので同一人物とするには若干の齟齬（そご）がある。古事記の垂仁天皇のところに「住処も持たぬ玉作り」（古事記）とある。大君（垂仁）は稲城（今日の堅粕―板付辺り）で兄の反乱と共に死んだサホビメ（髪を剃り、玉紐を腐らせて垂仁からの追手の捕獲から逃れた）の死を悲しみ、玉飾りを作った者どもをひどく憎みその者達の地を奪い去ったとの説明がある。風浪宮の東の宮（内宮）にはこの玉垂媛が祀られていたのではないかというのが私の仮説である。

内宮に天照大神、外宮に神功皇后の配置は壬申の乱の後に出来上がっている。これに対応するものとして、東宮（内宮）の玉垂媛宮と西宮（外宮）に神功皇后の配置が1800年前にあったとすると、失われた九州倭国における失われた風浪宮の東の宮が伊勢神社になるのではないだろうか。玉垂媛は稲城の城に焼死した垂仁天皇の妃であり、神功皇后の夫仲哀天皇の祖父の后であり、仲哀天皇・応神天皇の繁栄を呪う立場にある后であるからである。

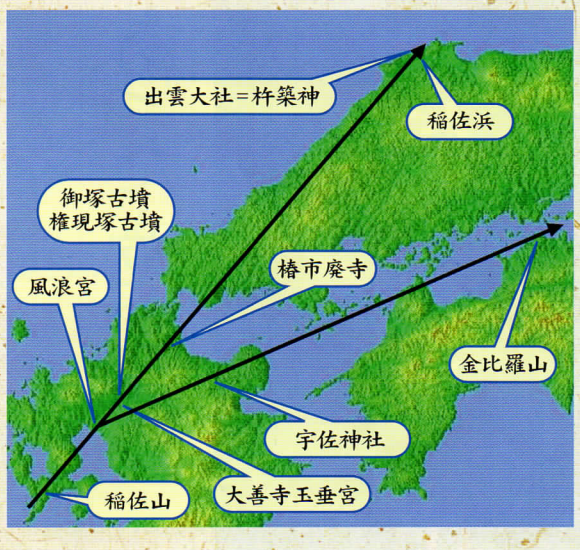
※4／後に、中臣鎌足が天武天皇より「藤原姓」を下賜される。藤の大臣の地位を貰うという意味と関係があるかもしれないという期待である。
※5／ここで、海石榴市とは椿市であり、行橋の椿一廃寺がその地であるというのが、私の説である。
※6／シラヒワケには、九州の天皇という意味があることが興味深い。

風浪宮と出雲大社

大川の風浪宮の鬼門（丑寅）※7の方向に大善寺玉垂宮がある。この大善寺玉垂宮の鬼門の方向100メートル程には、御塚古墳（おんづかこふん）、そのさらに鬼門の方向に隣り合って権現塚古墳（ごんげんづかこふん）がある。大善寺玉垂宮という寺の名前にお宮という神仏混合とそのうえ権現さまという神仏混合との奇妙な組み合わせと符合するところが興味深い。さらに鬼門の方向に進むと、京都郡（みやこぐん）の橘塚古墳、綾塚古墳、そして、行橋市の椿市廃寺が直線上に並び、興味深い鬼門（丑寅の方向）のラインが現われる。さらにこの鬼門のラインを延長すると大国主命（おおくにぬしのみこと）を祀る出雲大社にぶつかるのである。出雲大社の右に祀られるのは筑紫の社の多紀理毘売（たごりひめ）である。宗像三神の長女である。そして、出雲大社の西側の浜の名前は稲佐浜である。ならば、この風浪宮と出雲大社を結ぶ直線の方向を逆にして裏鬼門の方向に伸ばせば、長崎市の稲佐山に当たるのである。

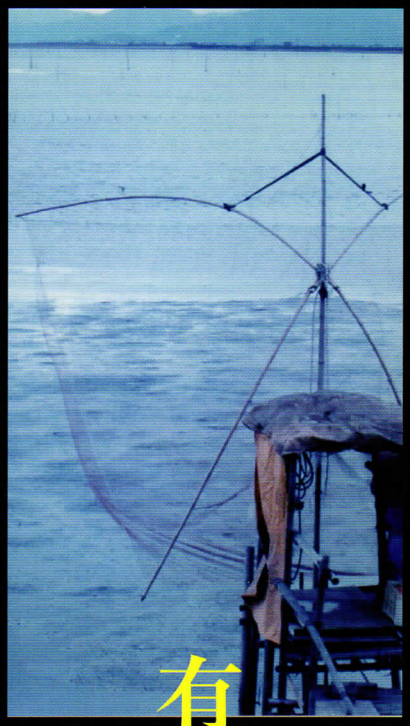


出雲大社の稲佐浜と長崎の稲佐山が風浪宮との関係で直線上に位置することは偶然であるのだろうかというのが、俄か古事記読みの研究の今日の動機となったのである。出雲大社の稲佐浜から神様は海に帰り、稲佐山から神が降って出現するならば「この鬼門と裏鬼門のラインは黄泉の国の入り口と出口を説明するのではないだろうか」という思いで地図を見ると、長崎の稲佐山の傍には黄泉の国の出口を思わせる佐賀県武雄市（旧山内町）の黒髪山と熊本の黒髪が対照的に配置されていることに気がつく。また、その傍には天からの乗り物である御船（天鳥船　アメノトリフネ）があり、それぞれ佐賀県武雄市の御船山と熊本県の御船がある。天上からタケミカヅチが降りて来るとき天空を飛ぶ船である。



鷹が留まった楠の木

※7／鬼門とは、北東（艮＝うしとら：丑と寅の間）の方位のこと。陰陽道では、鬼が出入りする方角であり、万事に忌むべき方角としている。鬼門とは反対の、南西（坤 ひつじさる）の方角を裏鬼門と言い、この方角も忌み嫌われる。



有明海と祭り

特集 2

干珠と満珠
有明海にあった竜宮城

海神・少童命
（わだつみのみこと）

大川市、筑後川の支流の花宗川（はなむねがわ）沿いに、2001年（平成13年）に千八百年祭を終えた風浪宮があります。風浪宮の祀神、少童命（わだつみのみこと）は日本列島を作った伊邪那岐・伊邪那美の子どもで古事記神話の頂点に立つ天照大神とは兄妹になります。ワダツミとは海のことで、少童命は、海神の宮すなわち竜宮城の主というわけです。

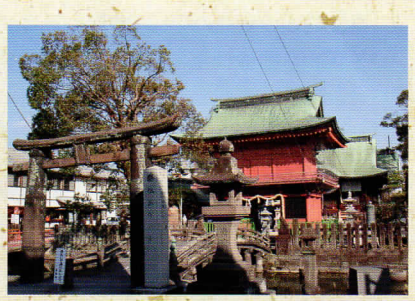
風浪宮縁起には、古事記神話の英雄の一人である神功皇后が新羅からの帰途、筑後葦原の地（大川榎津）に立ち寄った際、白鷺が忽然として現われ、東北の方角に飛び去るのを見て、その白鷺こそ勝運を開いた少童命の化身なりと考え、白鷺のとまった地に武内宿禰に命じて社殿を築き、阿曇磯良丸（あずみいそらまる）を斎主として少童命を祀ったとあります。阿曇磯良丸は海神から与えられたとされる干珠満珠（かんじゅまんじゅ）を持って皇后に従い海戦を指揮した海将で、風浪宮の現宮司阿曇氏の六十七代前のご先祖様です。日本で用いられる船の名前に「…丸」が使われるのは阿曇磯良丸に因んでいるということなので、干珠満珠を持って船を自在に操った阿曇磯良丸は、海を暮らしの場とする人々に深く尊敬されていたのです。その阿曇磯良丸の子孫が斎主として祀る少童命は、この意味でも海神すなわち竜宮城の主ということになります。

海幸彦と山幸彦

古事記には潮満珠（しおみつたま）と潮干珠（しおひるたま）と呼ばれる二つの珠と海神が登場する有名な物語が残されています。狩りを得意とする弟と海での漁を得意とする兄が、お互いの道具を取り替えて兄弟げんかの元となるという話で、海幸彦と山幸彦の話として有名です。海神の宮に出かけ、姫君と結婚して数年間滞在し、この世に戻ってくる話は浦島太郎伝説を思い起こさせます。これと同じような話は太平洋沿岸の海の民に広く伝えられているとのことなので、本来は海洋民族にとっての共通の説話だったのでしょう。

佐賀大学の近くにある与賀神社は興止日女命（よどひめのみこと）を、本庄神社は豊玉姫命（とよひめのみこと）を祭神としています。また、佐賀市大和町川上の嘉瀬川沿いに建つ興止日女神社の解説文には興止日女命と豊玉姫命を祭神とすると書いてあります。豊玉姫は

風浪宮


与賀神社

海神（わだつみ）の娘、一方與止日女は神功皇后の妹ということになっているので、系譜上は豊玉姫の方が相当上の世代のはずですが、両方の姫君は同一人物だと考えられています。山幸彦の孫が神武天皇（かむやまといはれびこのみこと）ということですから、豊玉姫は海神（わだつみのみこと）の娘で、初代天皇のおばあさんということになります。

與止日女命
（よどひめのみこと）

豊玉姫は古事記・日本書紀（記紀）の重要人物として登場しますが、與止日女は記紀のどこにも記載されていません。古事記の原型の一つと考えられている『肥前風土記』に、與止日女と同一人物であると考えられている世田姫が嘉瀬川の河上に鎮座する石神として登場します。肥前風土記の世田姫は往来する人の半分を生かし半分を殺す荒ぶる神として描かれていますが、後に大流行する八幡信仰の中での世田姫は、神功皇后に潮の干満を司る潮干珠と潮満珠を差し出して付き従う神、あるいは神功皇后の妹として再登場するのです。

干珠満珠を持つ阿曇磯良丸

肥前の国の神あるいは国の神を祀る巫女（しゃーまん）だった與止日女が、中央政権の神功皇后に従属したものだとも、あるいは狩猟民である縄文の民が稲作を中心とした弥生の権力に征服される様を示しているとする解釈もあるようです。また、神功皇后伝説自体が九州内における権力統一過程を描いたものだとの解釈もあり、必ずしもはっきりしているわけではありません。ただ、肥前の国の神の原型は、嘉瀬川と有明海の傍らに鎮座し、干潮と満潮を制御する二つの宝珠を有する水の神さまだったことだけは確かなようです。潮干珠と潮満珠という二つの宝珠は、干潮と満潮を司る竜宮城の主、海神（わだつみ）から贈られたものですから、與止日女神社、与賀神社、本庄神社が海神の娘豊玉姫を祭神として祀っているのはなる程とうなずけます。いやむしろ、有明の民、肥前の民が有明海の大きな干満の差をイメージして創作した潮干珠と潮満珠の説話を、中央政権が古事記・日本書紀に取り込んだのだと解釈する方が的を射ているかもしれません。

海幸彦と山幸彦

昔あるところに海幸彦、山幸彦という兄弟がいました。

兄の海幸彦は海での漁を弟の山幸彦は山で獣を狩るのを得意とした。同じような暮らしに飽きた兄弟は道具を取り替えることにし、海幸彦は山に狩りに出かけ、山幸彦は海に漁に出かけました。

ところが山幸彦は釣りの最中に釣り針をとられてしまいました。山幸彦は海幸彦に自分の剣で釣り針を作って返すことを申し出ましたが、海幸彦は自分の針でなければ受け取らないと拒みました。

困った山幸彦が海辺でたたずんでいると、塩椎神（しおつちのかみ）が現れ、海神（わだつみ）の宮に行くことを勧めました。山幸彦はそこで出会った豊玉姫（とよたまひめ）と結婚し、思いがけなく三年の月日を過ごしてしまいました。

ある日のこと山幸彦は兄との約束を思い出し、戻ることにしました。海神は、魚たちを呼び集めて釣り針を探し出すとともに、海幸彦との争いを心配して、兄と違う場所に水田を開くことと、海幸彦に「この鉤はおぼ鉤（憂鬱になる鈎針）、すす鉤（気がいらいらする釣り針）、貧鉤（貧しくなる釣り針）、うる鉤（愚かになる釣り針）」とまじないをかけて釣り針を返すようにと忠告し、潮の干満を制御することのできる「潮満珠と潮干珠」を渡しました。山幸彦が海神の教えに従って、まじないをかけながら釣り針を返し、兄とは違う低い土地で水田を開くと、山幸彦の水田では豊作が続くのに、海幸彦の水田は不作に悩まされました。

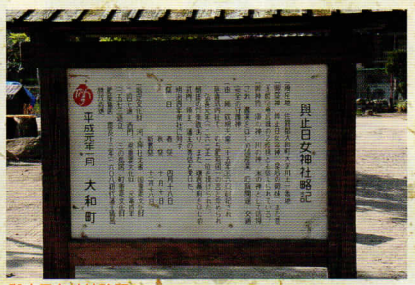
まじないの意味を悟った海幸彦が山幸彦を攻撃して戦が始まりました。山幸彦が潮満珠をかざすと猛烈な水流が起こり海幸彦を巻き込んでしまいました。許しを請う海幸彦をみて山幸彦が潮干珠をかざすと水流は消えて海幸彦は助けられました。

それ以後、海幸彦は山幸彦の守護人（まもりびと）として仕えることになったということです。

海幸彦と山幸彦の話は712年に完成したといわれる「古事記」の火遠理命（ほおりのみこと）の中にある神話です。まじないの部分は、「古事記」全訳注（次田真幸　講談社）による。

本庄神社

與止日女神社



與止日女神社略記

有明海と祭り

特集 3

旅情を誘う！ 道行き浮立（鹿島市音成地区）

耳を澄まして、遠く多良岳を望んでいると、かすかに笛や太鼓それに鉦の音が聞こえてくる。どこかで秋祭りが…と旅情を誘う。

散策しながら秋の訪れを感じていると段々と音色が大きくなってきた。そして角の路地を曲がった瞬間、鬼面をかぶり法被姿のかけうち（踊り手）が囃子に合わせて手を振り、足をあげて勇敢な踊り「面浮立（めんぶりゅう）」を披露し私を驚かせた。

面浮立は約400年前、龍造寺軍と大友勢の戦いの際、鍋島軍が鬼の面を被って追い払ったという説もあって、黒装束に身を包み踊るさまは、まさに鬼が今にも襲い掛かろうとする姿そのものだ。

その鬼は、決して人に害を及ぼすものではなく、生活を守り悪霊を退治するものとして庶民に親しまれてきた。

また、囃子方は、笛、鉦、太鼓に分かれ、面浮立を一段と引き立たせる役目を負い、特に花笠を付けた鉦打ちは、女性が務め彩りを添えている。

面浮立は、三つの曲目に分かれていると聞く。一つ目は道行き浮立で、町内を練り歩き、勇壮な所作を展開する。二つ目は神の前浮立で、神事芸能として表現する。三つ目は法楽浮立で、神の心を鎮めるために奉納するものだ。

佐賀県内には、鉦浮立など約200程度の浮立が今に伝えられているが、分布を見ると背振山系や東松浦地区は少なく、鳥栖地区から佐賀平野・鹿島地区で多く見られる。その中でも代表的な浮立が面浮立である。

「五穀豊穣」「雨乞い」などを祈願する道行き面浮立は、庶民の神事として舞い継がれている。大角を持ち口を結んだ男面が先頭で舞い、小角で口を開いた女面が後ろにつき列を組む。大地を踏みしめ力強く躍動する光景は、神仏の世界でいう悪霊を払う形態となっていて寺院で見られる仁王像がそうである。

過ぎゆく時を忘れ、何気なく空を見上げたら、秋の雲が移動し始めた。遙か昔の葉隠武士の姿と勇壮な面浮立を重ね合わせながら、郷土と出会い、心も和む一時を過ごした。

面浮立などが奉納される鹿島地方の秋祭りは、9月中旬に行われる。

特集 4

伝統を継承！ 御手水の的射り

矢が放された、そして歓声が沸いた。的の中心に書いてある「鬼」に命中だ。「今年は、五穀豊穣の願いが叶いそうだ」と長老が安堵した表情を見せた。

太良町御手水（おちょうず）地区での的射り（まといり）祭りの一コマです。この御手水地区は、約800年前の壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた平家の落人たちが身を隠すため、多良岳山系の急な斜面を利用して住み着いたと言われ、今も10世帯20人ほどが住んでいます。御手水という地名は、約300年前の諫早領地図には、落水（おちみず）と記載されていて、その読み方が、時代を経て御手水（おちょうず）と呼ぶようになったとも言われています。

その名の通り、地区内を散策すれば、神社の裏山や庭先などから湧き水が落水のように沸き出ていて豊富な水が棚田へと流れています。

的射り祭りの準備は、早朝から冷たい多良岳下ろしの風が吹く中、たき火を囲みながら樹齢数百年とも言われるイチョウの大樹の下で始まりました。

祭りに使う弓や矢などは、近くの山から採ってきます。弓は、真竹。矢は笹竹。的は、稲やカヤをカズラで編んで和紙をはります。

そして最後に、御手水神社の神主が的に「鬼」「東西南北」「●（黒星）」と書いて完成し、下の宮（しものみや）に奉納します。

全国的に伝わる的射りは、約1400年前、景行（けいこう）天皇が戦いの勝利を記念して、腕試しに矢を放ったのが始まりと言い伝えられ、佐賀県各地の神社でも正月の神事として行われています。

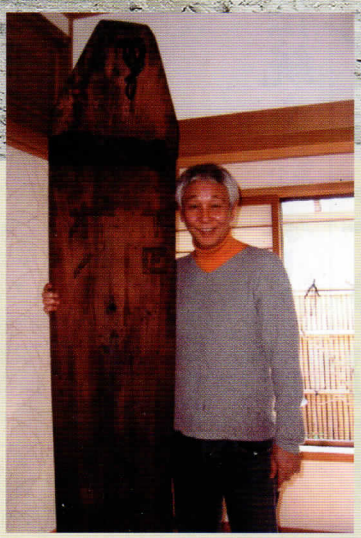
祭りは神事の後、地区の男たちと招かれた太良小学校三里分校の児童が、威勢の良いかけ声を掛けながら5メートルほど離れた「的」に向かって次々と矢を放ちます。ここ数年前から、地区民だけは、白装束に身を包み厳かな雰囲気をかもし出しています。的の中心に書かかれた「鬼」に当たると五穀豊穣に「東西南北」に当たると厄払いが叶うとされています。

ハイライトは、直径20センチほどの「黒星」の的を打ち抜く神事です。以前は当たると、その射手が家に持ち帰り、一年間の家内安全・家内繁栄のお守りとして神棚に飾っていたそうで、現在は、公民館に飾られるそうですが、全員が真剣な眼差しで狙いを定め射抜いていました。

その中、長老のひとりが「後継者が段々少なくなってきた」と淋しそうな表情を見せていました。

「的射り」は、毎年1月8日に太良町御手水下の宮で行われます。これからも続けてほしい祭のひとつです。

一石三鳥
潟スキー振興策



「君、有明海の干潟はすごいよ。日本でただ一個所、潟スキーが健在だからな。潟スキーは、ムツかけの漁具ではない。干潟を渡る乗り物なんだ。紀元前から中国にあった。乗り物として、いわば飛行機のルーツ！　しかし、干潟の埋め立で消える運命。君は九州男児でしょう。ガタスキーを守り給え」。

1963年（昭和38年）、東京で初対面の文化人類学者の西村朝日太郎氏（故人）が説いた「守り給え」という言葉が呪文（じゅもん）となった。その後、柴田恵司・長崎大学名誉教授と手分けし韓国、中国から米国まで潟スキーを追い掛けた。柴田氏は東アジアの潟スキー分布図を完成させた。

潟スキーの出合いから43年たった昨春、ぐるりんネットのトークショーで俳優の近藤正臣さんを相手に「将来、潟スキー国際大会を実現」と大見得を切った。理由は、消えゆく世界の潟スキーに最後の花を咲かせる場を提供したい一念だった。潟スキーは、マイナーだが歴史的な功績は大きい。紀元前300年、中国・黄河洪水伝説時代の禹王は潟スキーのおかげで天下を取った。16世紀、明軍が倭寇に逆転勝利できた「馬鼻の戦い」もこのマイナーな乗り物が貢献。潟スキーで敵船に忍び寄った明軍は、大潮で干潟に乗り上げた後も勝利の美酒に酔っていた倭寇の八幡船を逆襲、大勝した。かば焼きにしたムツゴロウを肴に酒を飲めるのもムツ掛け名人の有明海の潟スキーのおかげだ。

この有明海の潟スキーが世界に誇れるのは佐賀空港の飛行機と共存している点だ。最古の乗り物、潟スキーと最新の乗り物、旅客機が高さメートルの堤防を隔てて存在するのは世界広しといえども佐賀だけではなかろうか。この優位性を最大限活用、潟スキー学習体験館併設の『ムツゴロウ水族館』を立地すれば、佐賀の観光に貢献、空港は活性化、子供の環境学習・古里教育にもベスト、と秘かに思っている。

西日本新聞記者　川上　三太郎

有明海の不思議

潮の干満は主に月の引力が原因で起こります。
月に近い側が満潮の時、反対側も満潮になります。

■ 太良町のキャッチコピー「月の引力が見える町」

有明海の大きな干潟をもたらす潮の干満は主に月の引力が原因で起こります。佐賀県と長崎県の県境の町太良町を通ると町のあちこちに「月の引力が見える町」の看板が出ています。有明海の大きな干満から目には見えない月の引力を感じ取ろうというキャッチコピーは楽しくて、科学的にも納得ができるものです。

月の引力と潮の干満を示すのに第1図のような模式図がよく使われます。月の引力側が満潮になるのは理解できるとしても、その反対側も満潮になると言う説明に疑問を感じたことはありませんか。

■ 潮の干満の原因は引力と遠心力

潮の干満には引力とともに遠心力が関係しています。ハンマー投げの選手が、ハンマーを回転させている状態を想像してみてください。ハンマーに引力と遠心力が働いているのはすぐ分かると思いますが,回転させている人間も軸足を中心に回転して、引力と遠心力を受けているのです。

2つの天体が宇宙の中でバラバラに飛び散らないで動いているのは、両者の間に万有引力が働いて、適当な距離と速度で回転を続けているからです。第2図のように地球と月は、両者の共通重心Oのまわりを公転しています。共通重心というのは、月と地球が重さのない棒で繋がっていて、その両者がバランスするところだと考えてください。月と地球が共通重心のまわりを回転する時、地球上の一点(●印の所)も地球が回る半径と同じ半径で回転しているので引力とともに遠心力を受けています。

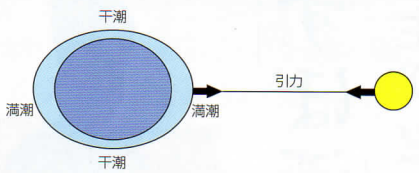
ハンマーを回している人の背中に遠心力が働いているのが想像できますか。その力が月と反対側の海でも満潮を引き起こす力です。

■ 干満をおこす力の大きさを考えてみましょう

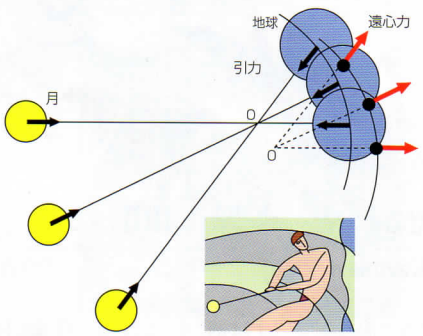
地球上のある点の物体には,第3図に示すような赤の遠心力と青の引力が働いています。二つの力を地球から外向きの力、法線方向の力と、地球表面からみて水平方向の力、接線方向の力に分解してみます。万有引力の法則と力のつり合いと少しだけ数学を使うと、地球の単位質量あたりの法線方向力が求められます。その法線方向の力で海水が吸い上げられるのです。

海水を吸い上げる力を図にしてみましょう。月に近い位置で法線方向の力は外向き最大の力となることは誰もが理解できると思いますが、月と反対側でも法線方向の力は外向き最大になるのです。これが月と反対側でも満潮になる理由です。月の反対側では引力より遠心力の方が大きくなるからだと考えたら納得できると思います。

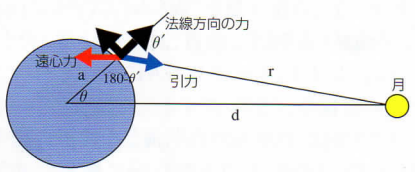
第1図　月の引力と干潮満潮



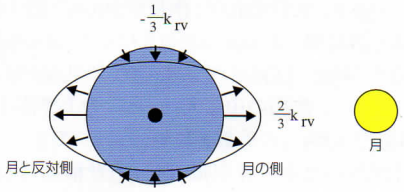
第2図　月と地球の間に働く引力と遠心力



第3図　法線方向の力



第4図　法線方向の力の分布



有明海と人

「潟もん」と「すぼ酒」
～有明海の食材を生かして～

だるま寿し　小野　和則さん

Kazunori Ono

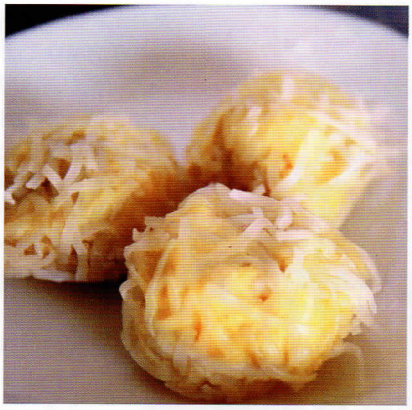
「“潟もん”と“すぼ酒”を」と板場に注文。「よっしゃ」と弾んだ声。その声の主は白石町の鮨処・だるま寿しの小野和則さんです。

しばらくすると、ワラスボの入った燗ビンと頭のでかいハゼクチがでてきました。このだるま寿司のある福富地区では有明海で捕れるワラスボやハゼクチ、ムツゴロウ アサリ、アゲマキなどの魚介類を“潟もん”（ガタモン）と言います “前海もん”（マエウミモン）と云う地域もあります。佐賀独特の透き通ったガラスの燗ビンの口からワラスボの頭が飛び出ています。初めて見る人にとって、グロテスクな顔面と突きでた鋭い歯は、まるで宇宙の怪物・エイリアンです。

ワラスボは、わが国の有明海と八代海の泥干潟や軟らかい泥底の沿岸のみに生息します。その姿は、ウナギのように細長く、赤紫っぽい色です。泥の中で生きるので眼は退化して表皮の下に埋没しています。干したワラスボを木槌で叩き、骨を軟らかくして焼き,地酒に浸します。それが香ばしいワラスボの“すぼ酒”です。河豚のヒレ酒よりも喉が鳴ります。有明海沿岸の地域では、ハゼクチのことを方言で「ハゼ」「ハシクイ」と言います。成長すれば、体長が50cmを超すものも珍しくありません。醤油で煮物にするときは、腸（はらわた）だけを出して、頭から尻尾まで丸ごと鍋に入れます。肉質が軟らかく味が淡白なので、病人食、離乳食として好まれます。ふっくらとした頬の身を箸でつかんで、口の中に入れると舌の上で溶けます。その“潟もん”と“すぼ酒”の珍味は、だるま寿しの看板メニューの一つです。

「自然の恵み　有明海、白石平野福富にしかない　この味を大切なお客様の食卓へ　だるま寿しが真心こめておとどけします」をモットーとする小野さんは,ふるさとの食材を生かす創作料理の達人です。

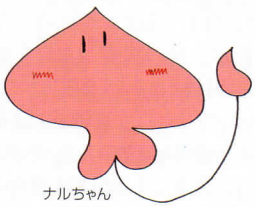
人との出会い、そして商品開発へ



(有)オフィス　タカハシ
高橋　勝則さん
Katunori　Takahashi

高橋さんは有明海ぐるりんネットの会員である。二年前の定例会で「ナルトビエイのしゅうまいを開発している。このしゅうまいの売りは何かを考えている」という。次には「商品ができたので試食をしてください」食べてみたが、いまいち臭いが気になるなと思っていたら、数か月後の定例会で佐賀市の居酒屋のメニューになったという。定例会終了後の恒例の飲み会はこの居酒屋でということになり、勇んで行って「なるとびしゅうまいを」と頼むと「売り切れました」とのこと。次回の定例会後もこの居酒屋に行き、ようやく商品名「有明海海鮮しゅうまい」を食べることができた。その後、この商品は玉屋なるほどザお中元・お歳暮に掲載されるようになった。オフィスタカハシのホームページによると、ナルトビエイは有明海の厄介者でアサリが大好物。01年から03年まで、9t、13t、15tと捕獲量が増えている。しかし、ナルトビエイは甘味や旨味があり、イワシの1／100の脂肪とコラーゲンやビタミンCがあり美容や老化防止に良いとのこと。

先日、高橋さんとナルトビエイとの出会いについて聞いてみた。



「商品開発するつもりなどなく、知人の誘いでナルトビエイの試食会に行っただけ。そこで、マスコミからいつ事業化するのかと聞かれたので、とりあえず有明漁連や大浦漁協に話を聞きに行ってみようと思った。話を聞くと漁業関係者の方々が困っているという。この人たちの役に立ちたいと思い、歯応えや味、豊富なゼラチン質など食材としての価値に注目して、イカとナルトビエイで、しゅうまいを作ることにした。課題のナルトビエイの臭いを消すことに悩んでいた時、テレビでナルトビエイで漁民が困っている事や肉を取り扱っている高橋さんの会社が紹介された。この番組を見た長崎のおばあさんから「昔からナルトビエイを食べるときは臭い消しに梅酢を使っていた」と電話がかかってきた。この電話をヒントに高橋さんは「酢」を使い、私たちが居酒屋で食べた「海鮮しゅうまい」からはあの臭いが消えていた。商品化するまで半年ほどだったという。現在インターネットを通じて販売している。

高橋さんは元中学校の技術教師だった。11年間続けた教師を辞めてさて何をしようか考えている時に、当時スペースワールド社長の川村祐三さんをテレビで見て「この人に会いに行こう」と思ったそうである。「会えたのですか」と聞くと「会ってくれた。」「その後何人もの人に会いに行ったが、アポなしでも一人を除いてみな会ってくれた。」とのことである。今、川村さんはオフィスタカハシの最高顧問になっている。

教師を辞めて最初の仕事はオリジナルなものにと考えていたところ、知人からオリジナルパズルの機械が売られていることを聞いて、自分の直感を信じてこれを買い、オリジナルパズル作りに乗り出すことになる。その後浜田省吾のツアー用オリジナルパズルも製作するなど、今ではオリジナルパズルでは日本一の会社でぐるりんネットが販売している有明海のジグソーパズルも高橋さんの会社の製作である。

ビジネスにおいては「この商売をしたら世の為、人の為になるか」を基準にしているという。一時期は「儲ける」ことを優先に考えていたが、現在彼と一緒に仕事をしているスタッフと出会う中で、このような気持ちになっていったという。

海の紅葉シチメンソウ
シチメンソウを育てる会

私たちの町東与賀町は、広大な干潟、豊富な魚介類、野鳥や塩生植物であるシチメンソウが自生する有明海と豊かな田園を有し、その恵みの中で伝統や文化を育んできました。

町の豊かな自然環境も、都市化の進展に伴い生活排水による水質汚染や森林開発等により、野生生物の減少や自然環境の悪化が進んでいます。

このような自然環境の中で自生しているシチメンソウは東与賀海岸に自生するアカザ科の一年生植物で、北海道のアッケシソウと並ぶ九州の代表的な塩生植物で、満潮時には冠水し、干潮時には潟地となるような限られた場所でしか生育しません。

シチメンソウの生育過程はまるで七面鳥のように色が変化する事からシチメンソウの名前がついています。

1月に発芽したときは緑、3月には淡紅色の本葉が出、5月は淡紅緑色葉、7月には淡黄緑色と変化します。そして花が終わり11月初旬の秋になると、全体が淡紅色になり紅葉の最盛期を迎え、多くの観光客を楽しませることになります。

このシチメンソウは1987年（昭和62年）5月、嬉野町で開催された第38回全国植樹祭への昭和天皇の行幸の折に、東与賀町にもお立ち寄りになられ、一躍脚光を浴び、それ以後町民ばかりではなく、広く県内外の人々に知られるようになりました。

世界に誇れる有明海の干潟、そこに生息する海の紅葉として景観をかもし出すシチメンソウを多くの人に知って頂くとともに、町民の財産として絶滅危惧種であるシチメンソウの保護気運が盛り上がり、1994年（平成6年）に有志11名でシチメンソウを育てる会が発足しました。

環境ボランティア団体として環境問題に積極的に取り組み今年で活動も12年となり、会員も30名を超えています。

町全体の強力な支援により、ほぼ定期的な自生地の清掃活動はもちろん、11月には東与賀町ふれあい町民まつり実行委員会のメンバーとしてのシチメンソウまつりの開催、シチメンソウのPR活動、12月と1月には種取り・種まきを実施しています。

観光の広域化により観光客も年々増加し、2004年（平成16年）には「干潟よか公園」の開園の影響もあり、年間観光客が20万人を超える状況となっています。特に毎年11月の第一土曜日に開催されるシチメンソウまつりは今年で13回目を迎えています。

このまつりは海の紅葉シチメンソウを見て頂こうと、最初はステージもビールケースを使用してのシチメンソウを育てる会の手づくりのまつりだったのですが、現在は関西・関東からも観光客が訪れる佐賀県でも代表的なまつりになっています。

昨年は「佐賀の美しい景観地区」にも指定され、現在はこの地区の景観に更に磨きをかけていくため、様々なプランづくりに積極的に取り組んでいます。

その一つのプランとして、この自然環境を町民の共有財産として守り、有明東与賀海岸周辺の環境美観が損なわれないように町ぐるみで取り組むとともに、町民ボランティアの拡充を図りながら、シチメンソウに限らず、観光ロード周辺を花いっぱいで埋め尽くし、年々増加する観光客になお一層楽しんで頂きたいと思って、有明海沿岸道路花いっぱい運動を計画しました。

今年は全国豊かな海づくり大会が佐賀県で開催され、放流は東与賀海岸で実施されると聞き海大会を是非成功させ、シチメンソウと花でいっぱいの東与賀町を全国に紹介することができる絶好の機会だと思って、この計画にも取り組んできました。

しかしながらシチメンソウは大量のゴミ漂着により何回も蒸れとゴミの重さから圧死に直面する危機にあいましたが、見ごろにはここ近年にない鮮やかな「海の紅葉」となりました。また花いっぱい運動で種を蒔いたコスモスロードも、台風・塩害・少雨により全国豊かな海づくり大会時には間に合わなかったものの、シチメンソウまつりの頃にはかなり開花し、観光客を和ませていました。

自然の力に何回も挫折しそうになりましたが、その都度皆さんの協力を得る事ができました。改めて人の心の温かみを感じました。

また来年・再来年とシチメンソウの保護だけではなく、観光ロードの新たな取り組みに挑戦したいと思っています。ただ我々シチメンソウを育てる会も高齢化が着実に進行しています。若い皆さんの加入を待っているところです。

シチメンソウを守る会　竹下　敏郎

鹿島フォーラム

ガタリンピックは渦のオリンピック

1984年（昭和59年）、佐賀県の総合計画が発表されて、私たちのふるさと「鹿島」には、新幹線も高速道路も通らないことが分かりました。高速交通体系から取り残された鹿島を何とかしようという危機感から、「どぎゃんすっとな、わいたち。この鹿島ば。」と、市内のみんなで鹿島の町をどうしていくのか考えようと、若者たちに呼びかけて、むらおこしグループ「フォーラム鹿島」が誕生しました。地域間の“きわ”民と官の“きわ”業種（産業）間“きわ”という三つの“きわ”を取り除き、市民みんなの力を合わせ、地域の活性化を図ろうと集まり、

1. 地域を愛する心の育成＝郷土愛の育成
2. ふるさとを自慢できる人財（材）の育成
3. 活力・維持

の、三つのテーマを掲げ地域づくりを展開していきました。

有明海は高潮対策で高い堤防があり、下には簡単には降りることができません。鹿島市の七浦地区の干潟のある堤防は、有明海の干満の差が6メートル位あるので、すごく高い堤防となっていました。その堤防から干潟に降りられるようにとスロープが出来ました。そのこけら落しをやりたいと、フォーラム鹿島に依頼がきました。その頃のメンバーは、地域資源のことについて色々と話し合いをしていました。有明海の干潟というのは、海苔の漁業としては、すばらしいプラスの財産ではあるけれども、どちらかというとマイナスの財産だと思っていました。やはり海というのは、唐津の海のように白砂青松、沖縄のような青い海に白い砂浜の方がいい、有明海というのは、火山灰でできた泥の海で海水浴場も出来ないと思っていました。しかし、考えてみると干潟というのは全国でもそう沢山ありません。全国の干潟の40%を有明海が占めるとのことです。このような広大な干潟は有明海だけです。「干満の差も日本一だ。じゃあこの干潟を売り出そう。」と、逆転の発想で、マイナスをプラスに転じようと干潟で運動会やろうということになりました。

しかし「運動会」ではあまり格好よくないので、どうせやるならば「オリンピック」にしようと、「渦の上のオリンピック‥渦オリンピック」という名前に決まりました。

私たちのフォーラム鹿島は、会議が終わったら第二フォーラムと称して、必ずお酒を飲みながら、その日の議論をもう一度蒸し返すことを続けています。その第二フォーラムで、皆でワイワイ飲んでいたところ、ろれつの回らなくなったメンバーが「渦オリンピック」を「ガタリンピック」と言いました。みんなハッとして「それがいい。ガタリンピックにしよう。」と決まりました。ネーミングがすばらしいということで日本イベント大賞を電通からいただきました。

こうして始まったガタリンピック。やってみると、6000人もお客さんがやって来て、やってる本人たちがビックリ。それがマスコミにでて、もっと元気になり、「来年はもっと頑張ってやってみよう。」と、2回目を行ったら2万人もの人が来て、その後22回を終え、毎回選手は約1200人で外国人選手は約150人。観客は約3万5000人。当日スタッフは800人を超える鹿島の大型イベントへと成長してきました。しかし、ただ有名になっただけでは、地域の活性化にはならない事が分かってきました。

そこで、第6回目からはガタリンピックの戦略を方向転換したのです。ガタリンピックを通して、鹿島のファンを沢山作っていこうという事で4F作戦というものを作りました。一番目は「地元のファン作り」。まずは、地元が燃えなくてはいけないという事です。二番目は「全国のファン作り」。鹿島という町の特徴や存在感を打ち出し、その名を全国に知ってもらおう。三番目は「都会の子供のファン作り」。都会の子供たちは今、頭から泥んこになる経験がないので、泥んこになれる場所を実体験として覚えていてくれるだろう。そして、将来的なファンとして鹿島のひいきに客になってもらおう。

四番目は「外国人のファン作り」。国際化時代を先取りし、鹿島という地域が日本という枠を超え世界中から支持を受け、文化やモノ、情報の交流が将来的な発展へつながるように、現在も多くの交流を行っています。

また、実行委員長など主なるスタッフは毎回交替しています。これは、当日、約800人ものスタッフのリーダーとしてトレーニング場ともなっているのです。これが、郷土愛の育成や人財の育成へと繋がっているのです。

22回を終え、ガタリンピックの経験者は百万人を超えました。百万人の人が、干潟（自然）の温かさや気持ちよさを知った事になります。また、干潟に入ると小さな穴が無数にあることに気付きます。カニやウミマイマイ、時にはムツゴロウも捕まえることが出来ます。有明海が生きていることを、多くの人たちが体感してくれています。有明海が生きているからこそ干潟で遊べるのです。ガタリンピックを経験した人たちは、きっと、個々の故郷に帰っても自然を大切にする心を忘れないと思っています。

また、これからも多くの人にガタリンピックを体感してもらい、“いのちの海・有明海”をみんなで守っていくきっかけになれればいいと思っています。

フォーラム鹿島　亀本　昌子

TOPICS 昭和天皇と有明海

2006年（平成18年）10月29日に第26回全国豊かな海づくり大会が佐賀県で行われ、天皇陛下が東与賀町の有明海にムツゴロウの稚魚を放流されました。その際に詠まれた歌が12月27日に佐賀県に贈られています。

眼前に有明海は広がりて今年生まれしむつごろう放つ

1961年（昭和36年）に昭和天皇も有明海を望まれて詠まれた歌があります。

「有明の干拓を憂えて」
めづらしき海蝸牛も海茸もほろびゆく日のなかれといのる

昭和天皇が生物学者であったことはよく知られています。中でもクラゲやイソギンチャクを小さくしたようなヒドロ虫という動物を専門に研究され、裕仁の名で7冊も著書を発表されています。また、貝類に関する研究にも熱心に取り組まれ、昭和天皇が採集された資料を基に専門の学者と共著で「相模湾産貝類」（1971年9月、丸善）を発刊されており、貝類にも深い造詣を有しておられました。象徴天皇となられた天皇が歌の中であれ、自分の意志を述べられることは、ほとんどないと聞いています。先の歌で使われている「いのる」という言葉でさえ禁句の一つとされており、数多く詠まれた歌の中でもこの歌にだけ使われています。それだけに、この歌には昭和天皇の強い願望を読み取ることができます。

白石町地先の国営干拓有明工区が1968年（昭和43年）に、福富工区と廻里江工区が1971年（昭和46年）に竣工していますから、昭和天皇がこの歌を詠まれた時、有明海沿岸域は干拓工事が最盛期だったはずです。食糧増産が至上命題であった時期、干拓で滅ぶかもしれない貝達に温かい眼差しを注がれ、禁句とされる「いのる」の文字に込められた昭和天皇の願望を、今後は私たちが引き継いでいかなければならないのです。

注：海蝸牛（うみまいまい）
腹足綱有肺類に分類される巻き貝で、唯一海に住むカタツムリの仲間です。瀬戸内海、有明海（川副町・柳川市・荒尾市・諫早湾）、山口県豊浦町に分布し、干潟の泥底を住み処とすると微小貝データベースにありますが、絶滅の危険の高い種になっており、最近有明海ではほとんど確認された例がありません。

2006年の 有明海

佐賀県　有明海再生課　川村　嘉応

平成18年度もまた、有明海ではいろいろなことが起こっています。ここでは特筆すべき海況と漁業生産について、触れてみます。

頻繁に貧酸素水塊が見られた

貧酸素は、海水中に溶けている酸素の量が少ない状態を指しています。貧酸素は海底に発生しますので、この状態になると、貝類や逃げ遅れた魚類が死んでしまいます。近年、諫早湾と佐賀県の鹿島沖に夏場の小潮の時期によく発生するようになりました。特に平成18年は、鹿島沖において、二枚貝類等にも影響するとされる溶存酸素飽和度が通常冬期であれば80%以上あるのに、10%以下の著しい貧酸素が8月上旬から10日間にも及びました。このような貧酸素水塊が頻発すると有明海の生物に与える影響が心配です。

タイラギ漁の再開

タイラギ漁はご存じのように潜水器漁業の方がヘルメット式で海に潜り、海底に立っているタイラギをカギのある道具で取る漁業です。タイラギは現在、干潟域にはよく見られるのですが、沖合漁場では減ってしまいました。しかし幸いなことに、今年は平成16年以来行われなかった漁が、12月15日に再開され、1月下旬までに貝柱重量で3トンほどの恵みをもたらしています。それでも、この量は平成8年度の約 1.5 %と少ないものです。国や県では、タイラギの復活を目指して、今年度からタイラギのへい死原因の研究や調査をはじめ、タイラギの子どもを作る技術開発にも成功しています。少しずつ将来の展望が見えてきています。

ノリ養殖は豊作

佐賀県では、2月8日の入札で、既に15億枚（金額で187億円）の乾ノリが生産され、昨年に引き続き豊作になりそうです。これは漁業者のたゆまぬ努力と、ノリ養殖に必要な環境・気象条件が揃ったためでしょうか。しかし、有明海全体のノリ養殖となると、昨年より悪い県もあるようです。4月の終了まで時間がありますので、生産が続けられることでしょう。有明ノリの豊作を祈ります。

ノリ養殖は栄養塩が継続して存在すると豊作になります。そのためには珪藻類などの植物プランクトンが増殖しないことが条件です。今年はまさにそのような年で、植物プランクトンの増殖がありません。しかしながら、植物プランクトンが増殖しないと貝類の餌が少ないことになります。貝類にとっても、ノリ養殖にとっても都合の良い環境、調和の取れた自然環境が重要です。自然は、自然のままで偏らない方が自然ですね。

TOPICS 有明海岸の漂着ごみ

毎年、有明海の湾奥部に位置する佐賀県の有明海岸には、梅雨の始まった６月頃から繰り返し大量のごみが漂着してきますが、2006年の今年、川副町や東与賀町の有明海岸に漂着したごみの量は、ピーク時には１万立方メートル以上にも達したといわれています。

これらのごみは、上流域の山や平野から流出したものが、筑後川をはじめ有明海に注ぎ込む多くの河川を通して海に流れ出し、南風や潮流に押し寄せられて海岸に漂着したものです。漂着ごみの中には、大量の葦くずや流木に混じって、家庭で使うプラスチック容器、ビニール袋や肥料袋、園芸用ポットなど、永久に腐敗しない厄介なプラスチック類のごみや空瓶、空缶なども多く混じっていました。

海岸に漂着したごみは、有明海特有の干潟景観を損なうばかりか、時には漁港や海岸の排水樋門を塞いだり、日本一を誇る有明海養殖ノリの商品価値を低下させてしまいます。また、有明海干潟は、日本でも有数の渡り鳥の中継地であり、ムツゴロウをはじめ、多くの種類の稀少な動植物が生息する貴重な干潟ですが、漂着ごみはこれらの動植物の生息環境にも悪影響を与えています。

東与賀の有明海岸堤防では、珍しい塩生植物のシチメンソウ（七面草）が自生しており、これが11月初めの「シチメンソウ祭り」の頃には、海岸一帯を真っ赤に染めて私たちの目を楽しませてくれますが、今年は７月の大雨で、大量の葦くずが潮に乗って堤防の防護柵を乗り越え、シチメンソウを覆い尽くしてしまいました。そこで、東与賀町では、有明海沿岸地域の大きなお祭りである「沖ノ島参り（お島さん参り）」の日（2006年は７月14日）にも、汗だくでシチメンソウの上に覆いかぶさった大量の葦くずを取り除く作業をされ、その後も、何度も有明海岸の漂着ごみの除去作業をされたとのことでした。さらに、地元でシチメンソウを守る活動をされている方々などのお蔭で美しい景観が保たれました。

有明海岸の漂着ごみ対策は、もはや市や町の行政の範囲を超えたものであり、国や県、漁業関係団体や県民も連携した対応が必要になっています。有明海のごみを除去する活動として、毎年、佐賀、長崎、福岡、熊本の４県の漁業者が中心となり、他の関係団体等とも連携して、有明海クリーンアップ事業が実施されています。

東与賀の有明海岸では、今年９月１日、古川佐賀県知事をはじめ、約500人のボランティアが参加して、朝７時から漂着ごみの除去作業が行われました。

その結果、機械では取り除くことができない岩の間のごみや堤防防護柵の外側にたまった葦くず、空缶、空瓶、廃プラスチック類も大量に引き上げられました。

このほかにも、有明海岸をきれいにする活動が沿岸各地で行われました。

多くの人が集まったボランティア活動の威力はすごいと思いました。

今、まさに有明海を豊かな海として再生し、未来に継承していくことが求められています。このためには、単に行政のみならず、上流の山々では、植林、間伐などの山の整備、中流域の河川や平野では、ごみの流出防止と水質保全活動、そして、海岸では、ごみ除去作業などを市民社会組織とも連携して、山、川、海の一連の環境活動となって盛り上げていくことが期待されています。

夏の雨上がりには、有明海岸へお子様連れで出かけてみてはいかがでしょうか。そこで、もし海岸の漂着ごみを見つけて、どこから来たのか、なぜこのような状況になったのか、どうすればよいのか等について、広大な干潟や飛び跳ねるムツゴロウや遠く波間にただよう水鳥たちを眺めながら、子供たちと多くのことを語り合っていただくことができれば、何物にもかえ難い生きた環境教育となるでしょう。

有明海と天気に関することわざ

有明海で漁をする人たち、
有明海沿岸で農業する
人たちが伝えてきた天気に関する
ことわざをあつめました。

雲

○多良岳を雲のおおうは時化
○天山に雲かくれば雨
○貝殻雲（絹積雲）は長時化のもと
○白雲糸を引けば暴風
○乾（北西）に雲行けば大風
○上り雲（北へ行く雲）は雨、下り雲（南に行く雲）は晴れ
○雲の佐賀（東）行き雨みやげ

風

○春の北東風（こち）は一夜漬け
○夏の北東風は台風の前ぶれ
○秋、東方より風吹けば雨をもよおすこと多し
○冬の北東風時化のもと
○春は西、夏は南、秋は北、東風は雨降ると知れ
○西風と夫婦喧嘩は夜になるとやむ
○大風は沖南風（ばや）まで行けば止まる
○ううかぜ（大風）は東から吹きはめて南に回り、
多良岳から吹きおろす時が最もひどく「多良岳おとし」
又は「多良ん前おとし」といって恐ろしい

光

○朝日天を焦がすごとく赤ければ大風
○船の帆が水によくうつるときは雨が近い
○ながせ（梅雨）の夕晴れ、翌朝は雨
○夏の夕焼け宵に川越せ、秋の夕焼け宵に鎌とげ
○多良に（ううやまに）たちもん（太陽と同じ方向に現れる虹）
のする時は、ゆうじんせんば（用心せねば）
○冬のひとつ雷さんは、錨切って逃げろ
○星がキラキラ動くと大風
○島原、大牟田の汽笛が聞こえると雨が近い
○沖のごめき（海鳴り）の時は雨になる

動物

○海スズメ多く飛び来るは雨風の兆
○ヘビの木登りは大雨
○大亀が浮いて移動すると必ず時化る

その他

○茶わんに、ごはん粒が多くつくと晴れ
○二、八月思う子船に乗すんな

「有明海の天気のことわざ」による（1986年　有明海海難防止対策推進連絡会／編　事務局　三池海上保安部）

会員募集!!

もっと有明海を楽しもう

NPO法人有明海ぐるりんネット

マスコミに有明海の異変が大きく取り上げられ、有明海の環境が社会問題になっていますが、有明海は今でも個性的で魅力的です。禁漁指定をしている場所とはいえ芦刈保護区のムツゴロウは丸々と太って元気いっぱいですし、シオマネキは干潟の中を走り回っています。干潮時の干潟に沈む夕陽の美しさに息をのむことがあります。塩水にさらされながら種を保存し続けるシチメンソウの赤い帯には素直に感動させられます。泥の海,有明海は確かにつき合いにくい奴ですが、うまく付き合うと結構楽しい奴で、鹿島の人たちが発明した泥遊びを楽しむために都会の修学旅行生が大勢有明海にやってきます。

他にも有明海の魅力はいっぱいあるはずです。食、祭り、風景、何よりも有明海が大好きな仲間達。そんな有明海の魅力を一緒に探しましょう。そして我々が見つけ出した有明海の資産を子ども達に伝えていきましょう。そんな活動に参加してくれる仲間を求めています。定例会で開いている講座だけでも構いませんので一度顔を出してみてください。

活動は

●定例会／毎月第一月曜日　18:00～19:30
佐賀市城内サガテレビ大会議室
有明海講座

これまでの講座／有明海の魚・海苔、有明海の鳥、有明海の漁法、有明海と佐賀平野の雲と天気、有明海のゴミ、有明海沿岸域の風習・祭り、有明海と古事記、有明海と筑後川の民話、佐賀平野の水環境、有明海研究の現状など

●ぐるりん交流会

年一回、有明海に面した地域で、人と人の交流、産物の交流、情報の交流を行います。
これまでの開催地／福岡市、東与賀町、鹿島市、大川市

●冊子「有明海」の発刊

一号は佐賀県との協働で平成18年2月発刊。

組織は

理事長　荒牧 軍治
理　事　河野眞佐徳　菊池恵美　北島悦子
北村和秀　原田彰
会　員　30名

入会は

〒840-9502　佐賀市本庄町本庄1
佐賀大学理工学部都市工学科荒牧研究室
TEL0952-28-8688
e-mail aramakig@cc.saga-u.ac.jp

電話又は電子メールでご連絡ください。
あるいは直接定例会（有明海講座）にご出席ください。

会費は10,000円／年

活動資金、ご協力ください!!

オリジナルの有明海写真パズル発売

もっと有明海を身近に。
NPO法人有明海ぐるりんネットでは、
有明海のジグソーパズルを販売しています。
指先や頭の体操に、贈り物にいかがでしょうか。

●パズルの種類／4種類
●価　格／パズル　1,980円
額　1,980円
パズル額セット　3,600円

ご注文は、メールまたはお電話で

荒牧　軍治　aramakig@cc.saga-u.ac.jp
Tel:0952-28-8688
Fax:0952-28-8699

Ⓐ

Ⓑ

Ⓒ

Ⓓ

企画　販売：NPO法人有明海ぐるりんネット
製　作：元祖ばずる屋さんの(有)オフィス・タカハシ
Tel:0952-53-8234
撮　影：北村　和秀

Contents

特集　有明海と祭り

大川の風浪宮 ……2〜5

有明海にあった竜宮城 ……6·7

道行き浮立 ……8

御手水の的射り ……9

2006年の活動から

一石三鳥　潟スキー振興策 ……10

有明海の不思議

干満は なぜ起きる ……11

有明海と人

小野　和則さん ……12

高橋　勝則さん ……13

シチメンソウを育てる会 ……14

フォーラム鹿島 ……15

トピックス

昭和天皇と有明海 ……16

今年の有明海 ……16

有明海岸の漂着ごみ ……17

有明海の天気に関することわざ ……18

NPO法人有明海ぐるりんネット ……19

●発行／NPO法人有明海ぐるりんネット

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています。

有明海
Ariake Kai
2007
Vol.2